作文コンクール“Leading to the Future”　優秀賞作品

大阪府立清水谷高等学校２年　杞山（きやま）　穂花さん

みんな何が楽しくて毎日学校来てるんやろう。教室で一人、黙々とお弁当を食べていた中学二年生の私は、心の底からそう思っていた。友達がいなかった私は、とにかく学校が大嫌いだった。

そんな私だが、学校に一つ好きなところがあった。私には好きな先生がいたのだ。その人は定年間近の女性で、雰囲気がとても柔らかく、誰よりも私たち生徒のことを考えてくれていた。そして、私は先生に強く心惹かれることになる。始まりは、文化祭に学年全体で劇を発表することが決定したときだった。

「あんた、脚本やってくれへんか？」

笑顔を浮かべた先生は、私にそう問いかけたのだ。思いがけない言葉を受けた私は、鳴り響く心臓の音をただ聞いているしかなかった。先生は、続けて「あんたやったらできる」と言った。私がありがとうございます、と頭を下げると、それを承諾と受け取った先生は、早速この日の放課後に劇のテーマを伝えてくれた。私の胸ははずみ、世界がまるで生まれ変わったかのようにも思えた。教室の隅でお弁当を食べている私のことを、見ていてくれたなんて。かっこいい、と思った。こんな大人になりたい、どんな人のことも救い上げられる人になりたい、と強く願った。この日から、私の将来の夢は少しずつ固まり始めたのだ。

脚本は自分でも驚くほど好評で、文化祭での発表も成功し、ほんの少しだけ光り輝いた私の学校生活はまたいつもの日常へと姿を変えた。

いつの間にか中学三年生になった私はぼんやりと志望校を決めた。周りは卒業のムードに包まれ、先生の授業も残るところあと一回になっていた時。志望校に合格した人たち、残念ながらあと一歩届かなかった人たちを先生はぐるりと見渡す。そして、口をゆっくりと開いた。

「先生には夢があります。みんなにもあるやろう。先生の夢は、このクラスで、この学年で一人でもいいから、私を見て教師を目指しました、って言われることや。」

先生から溢れ出す熱い気持ちが、私の心と体を貫く。この瞬間、私の将来の夢は決定した。それは、今も変わっていない。“先生の夢を私が叶える”。つまり、“教師になる”ことだ。

先生から放たれた言葉たちは今も私の心を掴んで離さない。私には、夢がある。そして、それは私一人だけの夢ではないのだ。私は、二人分の夢を背負って、ただ嫌いなだけだったはずの学校へと今日も足を運ぶ。

主催　大阪教育大学　府立高校教職コンソーシアム